

菊池幽芳・新聞連載小説「寒潮」に表象された 四高生と女学生の恋愛

Analysis of Yuho Kikuchi's Love Romances *KANCHŌ*; the cold tide at the Meiji era

井 上 好 人
Yoshito Inoue

〈要旨〉

明治41年1月1日から大阪毎日新聞に連載されていた菊池幽芳の小説「寒潮」は、金沢の第四高等学校の学生と北陸女学院の女学生の恋愛を中心に、当時の学生たちを取り巻く世相を描いた家庭小説である。ところが、同小説は、当時、校風改革運動最中の四高学生たちによって次第に問題化され、同年4月21日で連載中止に追い込まれた。「寒潮事件」である。この小説「寒潮」とはどのような内容のものであり、当時の四高生や女学生をどのように表象していたのだろうか。小論は、石川県立図書館が所蔵している大阪毎日新聞の複写からプロットを再現し、学生堕落問題とマスメディアの関係について考察することを目的としている。

〈キーワード〉

旧制高校、新聞小説、学生の恋愛、校風改革運動

1 はじめに

1908（明治41）年1月1日から大阪毎日新聞に連載されていた菊池幽芳の小説「寒潮」は、当時、校風改革運動最中の第四高等学校の学生たちによって次第に問題化され、同年4月21日で連載中止に追い込まれた。「寒潮事件」である⁽¹⁾。

同小説は、「当時金沢で実際に起こったある事件を小説化した完全なノン・フィクション小説」（『近代文学研究叢書61』）と言われる。幽芳自身も「筑紫」という新聞記者として登場しているように、同小説の執筆にあたり、金沢で実際に起こっていた学生の恋愛が取材され小説中に盛り込まれた。そして、「小説の主人公中川乙哉は四高生で、其の頃文芸界や教育界の問題になっていた自然派の好典型堕落学生の一標本であったことから、その周囲にかかわってくる女学生のひとりが北陸女学院を退学させられるということがあり、その間に点綴される事件の数々はすべて事実符合したため、その反響は異常なまでに拡大された」（前書）というのである。

では、この小説「寒潮」とはどのような内容のものであり、当時の四高生や女学生をどのように表象していたのだろうか。小論は、菊池幽芳全集にも載っていないこの“幻”の小説を、石川県立図書館が所蔵している大阪毎日新聞の

複写から再現し、学生堕落問題とマスメディアの関係を考察することを目的としている。

菊池幽芳（1870－1947）は、茨城県水戸生まれ。茨城県尋常中学校から小学校教員になったが、1891（明治24）年、大阪毎日新聞社記者となった。「新聞小説」の内容、形式を決定づけた文学者（岡保生）として、「己が罪」（1899年～1900年）や「乳姉妹」（1903年）をはじめとした時代感覚に冴えた家庭小説で読者を魅了し、1908（明治41）年当時の人気作家であった。また、同新聞社の社会部長、学芸部長、編集顧問を歴任し、1924（大正13）年には取締役役に昇任している。

2 ドラマの冒頭と登場人物

フランスへ留学したまま帰国しない夫（不二雄）をもつ町子。2人は不二雄が四高在学中に結婚し、そのまま不二雄はフランス留学へ旅立っている。町子は夫が留学先で「或海軍士官の未亡人と関係をつけて、今は三歳になる小児までできている」という噂を聞き心穏やかでない。果たして真相は如何ばかりか、町子は夫の親友である四高生・佐野から情報を得ようと金沢へ出向く。

早久保田町子（25歳）は、敦賀在住、色白、目に張りがある、口元が引締りどこか確としたところのありそうな、

また娘々らしい若々しさをもつ婦人である。夫が留学先から帰国しないことに不審の念を抱いている。その父は、♂久保田政則（長州土族で地方裁判所長）、夫（♂不二雄）は父方の親戚で、好男子、町子の2つ年上で従兄妹のような関係をもった幼馴染であった。金沢の中学→四高へ進学したが第一学年終了して久保田家の養子として迎えられ（町子と結婚式をあげ）3日後にフランスへ留学している。不二雄は3年の留学予定が過ぎたが帰国せず、すでに5年になろうとしている。久保田家が一切の学費を支給しているがすでに資産が底を尽こうとしている。噂によると、現地の海軍士官の未亡人と浅からぬ関係が生じて三歳になる子供までもうけているらしい。これが町子の不安の種である。

♀三國春子（25歳）は、町子の母方の親戚で、金沢在住である。男好きのするきりりとした細面の意地の有りそうな“美人後家”として素人下宿を営んでいる。下宿を求むるものが門前市をなす」という。夫は石川県出身で四高出の工学士として山口県に赴任中に結婚。婚家は代々藩の謡曲の師匠を勤めた素封家であったが、22歳の時、夫と死別している。現在の下宿人は、不二雄の友人・佐野、三原、岸の3人である。彼女の下宿営業は、将来、社会に立って立派な地位を作っていく青年を励ますことを意気に感じることから始められた。にもかかわらず、世間の眼差しは冷ややか、「いづれ何かの野心あつての事」「例の若後家の下宿商売」などと揶揄されている。男女交際観は、男女が互いに自信を持って交われば墮落の危険は未然に防げ、また品性や趣味の向上にも役立つ、と信じ実行している。

この春子宅の下宿生の詳細は次の通り。まず、♂佐野辰三（26歳）。不二雄とは金沢中学（金沢一中か二中？）の同級で親友、義兄弟の約束を結ぶ。2浪して四高へ、一年志願兵を経て現在、四高医科の3年。金沢在住の医者の子だが、養子に出て子供もある。「なかなかの心締りで分別らしい顔をしているがどこか愛嬌があつて磊落そうで、一寸人なつつこい雰囲気」である。次に、♂三原俊介（22歳）。苦学生、実家が貧しく、返済する約束で月々春子からの援助を受けている。海軍軍医志望（月々15円の学資支給される為）。身体丈夫、顔立ちもきりりとした剛健の風である。そして、♂岸真砂男。醜漢であるが小説では存在は薄い。

♀松村久代（17歳）は、不二雄の妹で、北陸女塾（北陸女学校を指しているものと思われる）に通う女学生である。父は不二雄の渡仏前に死亡しており、母は病弱のため1年前に紀州の郷里へ転居し、現在は春子に引き取られている。母は無教育な女性なので「今まで家庭の感化といふものが、ちつとも無つた」（町子談）。丸顔立の目元に何ともいぬぬ愛嬌、あどけない女学生風。よく勉強し無邪気であどけない。卒業後はさらに高等教育を受けようと思っている。男子学生から眼をつけられ手紙もよく来る、返事も出してい

るらしい。町子も春子も彼女の「墮落」を心配している。

♂中川乙哉は、四高2部（工科）2年である。出身地は明記されていない。北辰会（四高の校友会）の音楽部員、趣味はバイオリン。「服装も見苦しからず、一寸人品も悪くないやう」、「滑らかな油のやうな声、人を魅するその眼」が武器。下宿の部屋に西洋人形を置いており、これは彼の趣味であると共に、女学生の人気を高めるためのアイテムでもある。「いやに気取つた男で、女学生と懇意になる事が非常に巧い奴」として評判はあまり良くない。

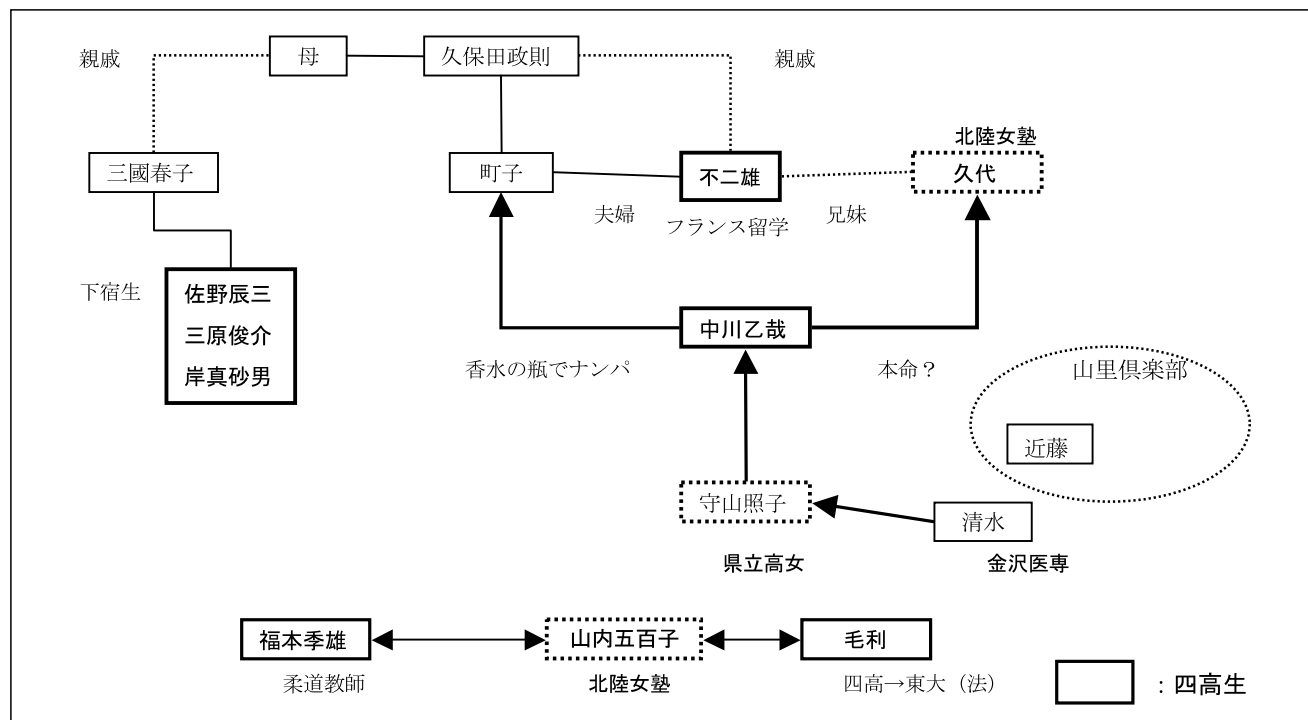
♂福本季雄（23-24歳）は、四高の柔道教師である。鹿児島県士族。「血色の美はしい、身体のかにも釣合よく発達した、男前のいゝ紳士風の青年」。昨年、一年の契約で東京から四高に招かれたが、留任する決意を固めている。また四高の聴講生としても修学している。五百子との噂が立ち、下宿を引き払い寄宿舎へ入る準備をしている。英会話習得のため教会のバイブルクラスに通っており、ここで久代らとも顔見知りになっている。

♀山内五百子は、北陸女塾研究科に在籍している美人である。孤児だったので幼稚園の頃から女塾の世話と受け寄宿舎に入っている。「学校の化身」「学校教育そのもの、生きたモデル」と評判がすこぶる良い。今は福本と交際しているが以前は毛利という男（四高→東大・法、女たらしの評判があり、後家に私生児を産ませている）と関係があり、その関係は今でも続いているらしい。管理の厳しい寄宿舎のわずかな自由時間（土曜日午後）に福本の家に通っている。

♀守山照子（19歳）は、香林坊の老舗の薬種商の娘で、県立高等女学校の補習科在籍である。すらりとした北国美人、色白の瓜実顔、潤みのある意味をもった眼をしている。北陸女塾の山内五百子と並ぶ「金澤女学界の明星」として名高い。監督教会（メソジスト教会か？）の信者。テニスの選手（チャンピオン）でオルガンが弾けるので運動会や音楽会ではいつも男子学生の注目の的となる「ハイカラ美人」である。去年、家に下宿させていた軍人（少尉）と関係した上、医学生とも関係したと新聞に出たことがある。結局、彼女は、「三国の富豪」（銀行経営者）のところで後妻に行く。五千円の支度金に目が眩んだという。

次に、金沢医専の生徒たちとして、まず、♂清水（22～23歳）。髪をチックで綺麗に分けた色白男。旅館兼上等下宿の6畳間を借りている。羅紗の卓被をかぶせた机の上に洋書、石膏の裸体像、香水の瓶を置き、壁には三色版の裸体婦人の額を掛けている。部屋には炬燵を置いており、これは「炬燵は北陸の交際機関だ」の意味があるらしい。学校の学生監の教師に毎月20円の“袖の下”を贈り数々の悪行による処分を免れている、との噂がある。彼ら（医学4年）には患者の予診が許されているので診察に託けて目星

登場人物関係図



をつけた女性の自宅へ行き、「カンタリ丁幾」という麻酔剤を使い怪しげな行為を行っている。守山照子にloveしており、下宿の電話室からTELして「お願いですから今すぐ来て下さいませんか」と誘うが、冷たい返事に声高に泣くような男でもある。

そして、♂近藤は、医専学生でありながら中川乙哉の提灯持ちもしている。さらに、“山里俱樂部”という「パクリ団体」にも所属している。この団体は女子学生の拐かしグループで、昨年検挙されたことがありその名前は女学生の一部に知られている。「山里俱樂部を注意遊ばせ」云々と。

大毎の記者として、♂嶋田は、金沢支部在勤。妻は北陸女塾の卒業生(22～3歳)でかなりの年齢差がある。そして、♂筑紫は、本社からの通いの記者であり、これは菊池幽芳自身である。

以上、主な登場人物の関係を上図で示した。

3 ドラマのモデルと実際の3つの恋愛事件

以上の登場人物にはどのような人間関係が配されているのだろうか。ドラマは、実際に起こった3つの恋愛事件を下敷きにしているという。

第一に、町子の夫・不二雄が留学先の海軍士官の未亡人と抜き差しならない関係になっているらしい、という設定は、四高生と日露戦争で戦死した軍人の未亡人との恋愛をヒントにしている。証言として、河田重(明治43年英法科卒)が「痛快なる四高時代」(『四高八十年』)の中で、「日露戦争

で戦死した軍人の未亡人に可愛がられた四高生もいたようだが」との回顧がある。

第二に、純真な女学生・久代が四高生・中川乙哉と知り合い交際を迫られている、という設定である。ハイカラで軟派学生の手練手管に翻弄される久代の運命はどうなるのか、そして久代に迫る“山里俱樂部”とは何者なのか、という謎がこの小説のヤマ場としての魅力である。これは、乙哉のモデルとして四高生N生(明治39年9月入学)と、久代のモデルとして北陸女学校のM子が判明している。小説中の「北陸女塾」とは私立北陸女学校のことである。同校は、1884(明治17)年、米国人メリー・K.ヘッセルにより私塾として開学、翌、1885(同18)年、金沢女学校、1900(同33)年北陸女学校と改称している。学校法人北陸学院の前身である⁽²⁾。

第三に、北陸女塾の専攻科生である山内五百子と四高の柔道教師・福本季雄との純愛である。五百子はこれが原因で女学校を退学させられるが、小説が慌ただしく終幕を迎えるので、この2人の恋愛の行く末については詳らかに展開されずに中途半端な幕切れとなってしまっている。また、この恋愛のモデルについては残念ながら未詳である。

4 ストーリー

4-1 町子、汽車の中で乙哉からナンパされる

町子、金沢へ向けての汽車の中。金沢へ出向く目的は、不二雄の妹・久代に会うことと、不二雄の四高の学友に会

って彼の消息を確かめることである。その列車の中で、ハイカラ四高生・中川乙哉にナンパされる。乙哉は松任で下車するが、小さな香水のビンをこっそり町子の巾着袋の中に残していく。

4-2 久代、乙哉からの手紙を受け取る

久代は中川乙哉からの手紙を受けとる。女性名の差出人を装い、白薔薇（ローズマリー）の香水の匂い、桃色の洋紙に紫インキの文字で書かれている。「天使の如く無邪気なる貴嬢」との呼びかけで始まっている。「語らう友もなき下宿の一室にたゞ一挺のヴァイオリンを侶として空しく懷を千里の暮雲に馳せ、よな——木枯の音に淋しき夢を驚かされて居ます」と、乙哉は自分を紹介し、「決して金色夜叉の貫一のやうな嘆を私に與へて下さるな」との口説き文句を吐く。そして次のように久代を誘うのである。「私は毎夕公園を散歩しますが、今日は三時半に上の池の卯辰山に向つた方のベンチに腰を掛けて居ます。貴嬢是非とも来て下さい。人目がなければ内橋亭で薄茶を飲ませやう。」と。

久代は乙哉に会いに出かける。兼六園内の茶亭に入り2人きりになり、「敷てある怪しげな郡内の座布団を、少し乙哉から遠ざけてその上に坐る。乙哉、『そんなに離れずともいいでせう。』」久代は下宿を春子の所に移っていたが、乙哉はその転居先を聞き出そうとする。久代の態度がはっきりしないので「僕は貴嬢と約束する事が出来れば、この上にも精神を傾けて勉強します」と迫る。久代は顔を染めたまま黙っている。「久代さん、神聖の恋は青春の血潮に充たわれ——の生命です。お互ひにそれを楽しみ合う事は、少しも良心に恥ぢぬ事ではありませんか」と『魔風恋風』の小説本を渡す（以前、久代がその後編を読みたいと言っていた）。下宿に誘うが久代は辞するので、とりあえず2日後の音楽会のチケットを渡す。

乙哉の用いる恋愛アイテムはなかなか凝っている。手紙はもちろんのこと、香水のビン、西洋人形、小説本、音楽会チケットといった女性の好むアイテムを周到に用意している。金沢医専の学生が〈電話〉でデートの申込みをする場面もあり、当時のハイカラ生活を象徴するものが小説中に散りばめられ、読者の関心を惹いたことであろう。また、交際場として、兼六園の茶亭、音楽会、活動写真、カルタ会が設定されている。

4-3 近年の女学生の墮落ぶり

筑紫の口を借りて近年の女学生の墮落と腐敗ぶりが次のように語られる。女子の徳操教育の欠如、ゆえの無節操、よって女学生の腐敗は東京を中心に今後田舎へ広がるだろう、と。また、「今の男女学生といふものはわれ——には逆も想像の出来ん程に違った世界を形作つて居るんだから

ね」と。東京の学生の墮落については、具体的に、本郷の或る学校で、生徒の身体検査を行ったところ梅毒患者が7名を含め全校生徒の約2割が花柳病に感染していたこと、地方から出てくる富豪の女学生の間に学生の男妾を置くことが流行しており、特に、早稲田の学生は喜んで男妾をひきうけていること、「或書物」が女学生の間で「跋扈する勢い」で、東京では人間の性欲を露骨に書いた小説が自然主義の名の下に歓迎されていること、が語られる。

4-4 久代、乙哉と絶交する

久代の写真が東京の時事新報に載る。新聞紙上の美人コンテストで久代は石川県の五美人のうち第二等になっていたのだ。誰が写真を勝手に送ったのか。このため、東京の学生から数通の手紙が舞い込んでいる。久代の部屋から乙哉からの手紙と香水の瓶が出てくる。春子は心配になり、彼のことについて佐野と三原に尋ねる。三原は一度乙哉を柔道の技で投げつけたことがあるらしい。三原の弁は次の通り。「どうも彼奴は始めつから虫の好ない奴で、よく音楽会だの運動会だので、女とベチャベチャする奴ですがね。……かういふ奴が居るから四高の生徒が墮落したなど、云はれるんだと思ふと、急に腹が立つて来たので、一ツ制裁を加へて度肝を抜いてやらうと、……得意の柔道の手で二間ばかり先へ物の見事に投げ付てやつたんで……。」と。

春子と町子は久代に、乙哉からの手紙と香水の瓶のことを尋ねる。夏に海水浴の帰りの汽車の中で知り合い、尾山座での活動写真のときにそれを着物の袂に入られた、という。交際しているのか？と問いつめられて「……」（無言）になる。すっかりしょげて反省している。「はい、……もう決して交際なんか致しません。」そこで、町子は、香水の瓶、『魔風恋風』の本、そして音楽会の切符を返しに乙哉の下宿へ出向き、久代との交際を断る。乙哉はグーの音も出ない。

そのあと近藤が来て、乙哉に策を授ける。山里倶楽部を利用しようと。

4-5 近藤の陰謀

ある日、春子方に「金澤新報」という新聞が投げ込まれる。三面記事欄に「美人後家の素人下宿」という題で、春子を揶揄した記事が載せられている。そして久代に会いに或る女性が訪れる。「星華女史・今津歌子」と名乗る彼女が懷から取り出したものは以前久代が乙哉に送った手紙で「金澤新報」の記者が手に入れたものだという。そしてこれが新聞に掲載されようとするところを制止して新聞社に談判してやろうとのこと。久代は思わず頼んでしまい、その正否を聞きに午後になって女史の家に行く。そこに待っていた

のは乙哉であった。彼は再び久代に交際を迫るが久代は固辞する。そこへ壮士風の男(金澤新報の記者)が入ってくる。久代は女史宅を出る。

久代の乙哉への気持ちは、「自分の気では中川乙哉に恋して居たとは思はぬが、少なくとも懐かしい人に思つて居たのは、どうした間違つた心であろうと、われとわが心に愛想を尽」かしている。星華女史が再び訪ねてくる。新聞の校正刷を取り出し「男女学生の密会」というタイトルで「不義の逢瀬を楽しむ」という内容の記事を見せる。久代が体中の血が凍る思いを感じていると、女史はその原稿を金で買い取ればよい、30円で済むらしい、夕方までに用意して来宅してほしい、とほのめかす。

久代の不審な様子に気づいた春子は、久代に正直に話そうと告げ、久代は事の顛末を打ち明ける。春子は大毎特派員・嶋田に相談しようと決める。嶋田は警察部長の俳友でもあるからだ。嶋田は久代に代わり女史宅に出向き談判する。女史一味の脅迫は久代にだけでなく乙哉にも及んでいたことが明らかになる。

4-6 久代と五百子、山里倶楽部に襲われる

久代と五百子が北陸女塾の体操科の女教師に連れられて小立野でのカルタ会に参加しての帰り、山里倶楽部に襲われる。久代は近藤ら2人の男に抱きすくめられ気絶し、猿ぐつわを填められ拉致される。五百子は坂道を下って逃げ無事広坂通に出て警察署に走る。拉致されていった久代は、たまたま兼六園を横切っていた三原に助けられる。(三原):「『貴様等は何ものか。怪しからん奴だ』と云ひざま、電光石火、物の見事に柔道の手で投げつけた。」(久代):「『あゝ、三原さん!』と久代はわれを忘れて叫んで、三原の手に取縋つた。そして強く――両手で三原の手をかゝるやうにして、乳のあたりに抱きしめた。三原は久代に取縋られて、満身に痺れるやうな小微動を感じた。暫らくそのまゝに任して居たが、……」三原は兵児帯で近藤の手を縛り、久代を伴い紅葉山を下りていく。

4-7 作者が四高生の反発をかわそうと予防線を張る

作者は小説中に片町の石川屋での四高生の次のような会話を描写し批判をかわそうとする(3月16日、76回)。「全体寒潮は我々四高生を侮辱したものだな。後家を狙つてゐるとか、女学生と通ずるとか、あれぢや学校は墮落学生の巢窟でありさうに見える。四高の風紀は決して紊乱して居らん……」「僕は京都だから善く知つてゐるが、三高の生徒などこそ実にひどいぜ。宮川町だの西陣などの遊郭を得意にしてるんだから、われ――の中には遊廓に足踏するやうな奴は居らんからなア」「四高の事をいふならば、医学専門学校はどうだ。それこそ実に腐敗の頂点に達してゐるぜ。四高

を槍玉に挙げるのなら専門学校を先に書くのが当然だ。僕は暫らく四年の生徒と一緒に居たがね。内幕を聞いて見ると、姦通罪などを犯してる奴は何人あるか知れない位だぜ。」

4-8 山内五百子、北陸女塾からの謹慎命令と退学処分

このあたりから作者の分身である筑紫が登場して、直接見聞するという設定になる。この連載小説が原因で金沢の女学校にひと騒動起こっていることが書かれる。「職員会議を開いて、全校生徒に訓示を下すといふ騒ぎ」「特に女塾の方では、今まで生徒に舞踏を教えて居たのをすっかり廃して丁つたさうです。」「兎角クリスチアンの学校は神経過敏なものだから……。併しとんだ方面に影響を及ぼしたものですな。」と。

筑紫は五百子の退学処分について心を悩ませている。「五百子への同情よりはまづ学校に対する反抗心がむら――と高まるのだ。同時にまた筑紫は自分がこの事件についての責任者であると知ると、自己の感情は別問題として甚しく心配になる。」福本は謹慎の情を表すため、洗礼を受けることを決心する。教会の場面でドラマを終わる。

5 学生の墮落問題とマスメディア

以上のプロットでわかるように、この小説「寒潮」は、恋愛アイテムとして、香水のビン、西洋人形、手紙、小説本、電話、交際場として茶亭、音楽会、活動写真、カルタ会が設定され、ハイカラでお洒落な学生社会の風俗を垣間見せることで、世間の関心をいや増したことが推察できる。もちろん、それぞれのエピソードには、実際の学生を取り巻いていた様々な出来事の裏付けがあったのも確かである。

例えば、小説中の三国春子の経営する「素人下宿」は「例の若後家の下宿商売」などと揶揄されているが、当時四高生だった品川主計(明治37年入学、40年卒)の次のような証言が残っている。

「(2年生になって) 今年は勉強しようと犀川のほとりにあった素人下宿に入り、スポーツもほどほどにした。閑静で眺めもよく、造作もみごとに四畳半であった。うちの人は四十五六のきれいな婦人と十五位の小娘の二人だけであった。母親の方が時々色目を使うように思われたのはうるさかったが、やがて同期生のずばぬけて人のいい河津君が二階の方に入ってきたので助かった。……(その後、品川は三々塾に入り下宿を出る) ……あとでのことだが、下宿の二階にいた河津君は親娘の双方にひっかかって抜きさしならぬ羽目になったらしい。女なんかに敗けるものかといつも頑なに気張っている私だって、つづけておたらどうなったか判つたものではない。」(品川主計『反骨の人

生』および『四高八十年』)

四高生や医専生が、将来のエリートとして、各家庭の養子候補として引っ張りだこであったことがわかる。その意味で、四高生の生態や動向に、現代の私たちが想像する以上に、当時の人々は関心をもったのである。では、この小説が、かくも世間を騒がせ、とりわけ四高生の過敏な反応を呼び起こした背景を、もっと詳しくみてみよう。

1900年代から1910年代にかけては、男子学生の風紀問題と合わせて、「女学生堕落論」が花盛りとなる時期であった。「女学生、何等忌はしき名ぞ。海老茶式部、何等淫逸なる声ぞ」(『女学生』『日本人』1903年6月20日、41頁)などと、雑誌や新聞の社会面は「海老茶式部」を盛んに揶揄するようになる。「誌上では府下の女学生が堕落しつくしたかのようにはやしたてた」(深谷、1998、201頁)のである。その多くは捏造記事であったとはいえ、世間の関心をいや増した。稲垣(2007)は、このような「堕落女学生」のイメージ形成の背景に、良妻賢母主義を柱とした高等女学校教育の汎化・強化があったことを指摘し、社会の変化に対する「語る側」の不安や危惧の表出として読み解いている。

地方都市である金沢の新聞ではどのような当時どのような論調が展開されていたのであろうか。北陸新聞1908(明治41)年4月29日に「医専校生徒看護婦と情死を企つ」と大仰な見出しの記事が載った⁽³⁾。この記事を読みれば、男の二股交際が発覚したという滑稽な出来事にすぎないのであるが、学生と看護婦という設定が世人の関心を惹き付けるとの思惑から掲載が決定されたのであろう。サブタイトルの「浪漫的な男、前情婦の仲居を捨て看護婦と通ず、所謂堕落書生の好標本」という文句から、学生の堕落問題として槍玉に挙げようとする意図が窺える。

また、この記事が、「寒潮事件」を意識したものであることは、次の前口上から明らかである。「寒潮なる劇が尾山座の舞台に上せらるると一部学生は大挙芝居座へ押しかけ、風紀厳粛なる金沢学生社会の内幕と称して大阪の一新聞が掲載した架空的の小説を劇として金沢人士に観覧せしむるは我々を侮辱するものなれば須らく右劇の興業を中止せよと迫りたる事実は世人のよく知る所、或者は学生連の申込みを至極尤の次第と肯き、吾人共に金沢学生の風紀は寒潮劇其物程には堕落し居らざるべしと信じたるに豈図らんや学生社会の堕落さ加減は事実に徴して寒潮劇より以上なることを発見したり」と前口上を述べて、「事実とは何ぞ、学生の情死未遂、即ち之れ！勿論此一事を以て金沢の学生は悉く堕落の淵に懸りつつありとは断言せざれども一事が万事といふ俚諺のあるを如何せんやである、次に此情死未遂事件の真相を記さん」と。

ところで、「寒潮」に出てきた「パクリ団・山里倶楽部」とは、当時の世情を賑わわせていたナンパグループの一つ

である。北国新聞1908(明治41)年2月5日付に「パクリ団」と題する記事が載っている。これによると、「パクリ団」とは「女学生と云はず良家の処女と云はず片ッ端より誘惑の罠に陥れつゝ風紀を紊す悪書生」で、東京に最も多いが、金沢においても不良学生が種々の団体を組織し互いに気脈を通じて跋扈しているという⁽⁴⁾。

また、北陸新聞1908(明治41)年6月13日から連載された「照魔鏡」と題した記事でも、「金沢の学生界に類を以て集まる一群のパクリ団」の手口を詳らかに紹介し、世上の父兄に「最愛の子女をして彼等が手段に乗ぜられ組上の肉たらしむる勿れ」と忠告している。

上記のような地方新聞でも大きく賑わせた社会面記事に便乗したのが、連載小説である。菊池幽芳『己が罪』(1899年～1900年)や小杉天外の『魔風恋風』(1903年、読売新聞連載)がその代表である。後者は、帝国女学院に通う才色兼備の主人公・萩野初野と彼女に想いを寄せる男たちのドラマであるが、新思想としての“恋愛”が「堕落」というレッテルを貼られる過程を描いているように、女学生の恋愛はハッピーエンドではなく、性関係から不幸な末路を辿るのがお決まりのパターンであった。

教育の拡充に伴うリテラシーの向上が印刷文化を花開かせ、人々の好奇心が家庭小説という形で集約化・類型化され大量に流通するようになる。「寒潮」もこれらパターンを踏襲した一作品に過ぎない。都会を舞台に、そのハイカラで華やかな文化の影に潜む甘い罠、という設定が受け容れられ、人々の手軽な娯楽として「閉塞した現実からのつかの間の解放をもたらし、フィクションの世界に大衆の欲望を開発する装置となっていく」(関肇、1997、190頁)のである。まさに、佐藤(2006)の指摘するように、このようなスキャンダルは、明治三十年代の大衆の情報メディア・ネットワークの整備と軌を一にするように“生み出されていく”のである⁽⁵⁾。

このようにみると、「寒潮」の実際の事件とモデルを取り込んだストーリー展開は、当時の学生小説／演劇ブームに寄り添うものであったことがわかる。菊池幽芳および大阪毎日新聞社のとったこの娯楽と報道の混合戦略は、当時の新聞社のひとつの方向性に沿っていたものであった。同紙が石川県でのシェア拡大を企図して、舞台を金沢、四高としたことは、学生たちの反発によって連載が中止されたにもかかわらず、期待される以上の読者の関心を集めたという点で、当初の目論見を充分達成し成功裏に終わったとみてよいのかもしれない。

注

- (1)「寒潮事件」と呼ばれる四高生の大毎紙その他への抗議運動の顛末とその背景については、井上(2006)および井上(2008)

で考察している。

- (2) 女性ヒロインにミッション・スクールの在籍生が配置されているところが、キャストの妙である。田山花袋の『蒲団』(1907年)に登場する女弟子のイメージをはじめ、文学作品に表象されたミッション・ガールのイメージについては、佐藤(2006)の秀逸な論考がある。
- (3) その内容は次のようなものである。福島県の田舎生まれの金沢医学専門学校生徒「何川某」は「百万石の城下たる北国一の都会の風が身に沁むにつれ何時か墮落の淵へ引入れられて学友と曲輪(くるわ)通ひもすれば茶屋酒の味も覚え」、とある仲居と情を通じるようになったが、厭気がさすようになり「卒業の暁は必ずお前を妻に迎へるからと欺し騙して」里へ帰させたまではよかったが、今度は看護婦と情を通じるようになった。一方、看護婦は市内の産婆の娘であったが「極々の醜婦にて二十の年を越しても縁遠き」境遇から病院の看護婦として勤めているときに、「何川」と知り合い夫婦の約束をし下宿へ転がり込み夫婦同然の生活をはじめた。そういう頃、先の情婦が郷里にて「何川」の卒業の日を指折り数えて待っていたところ連絡もなく、とうとう金沢に出て来て彼の下宿を訪ねたところ二股をかけられていたことがわかったという次第。泣き崩れる情婦に困った「何川」は一計を案じ「一葉を取出してグツと嚙干し虚空を掴んで七転八倒、苦しみ悶へ見せたのは可笑しくも亦悪むべし」の苦しい独り芝居というオチで記事は終わっている。
- (4) その手口は、芝居や寄席で年頃の女性を物色し隣席に座り馴れ馴れしく言葉をかけて様子を窺うというもので、そのうち密かに手を握ってくるが、もし邪険に振り回らわれないと見込みがあるものとしてそのまま料理屋へと誘われ、「一旦その手に罹れる女は蛇に睨まれたる蛙の如く遁れんとして遁

る、能はず遂に身を以て墮落の淵深く陥るなり」という。当局のほうでも、彼らをたとえ検挙しても多くの場合厳戒処分に過ぎないからいよいよ図に乗って不良行為を逞しくしているのである。

- (5) 日本は欧米に比べ、近代新聞システムの普及のスピードが速く、「大新聞」でもなく「小新聞」ではない「中新聞」こそが中流階層の国民的言説空間の礎になったという。(佐藤卓, 1998, 『現代メディア考』)。

参考文献

- 深谷昌志, 1998, 『教育名著選集② 良妻賢母主義的教育』黎明書房。
- 稲垣恭子, 2007, 『女学校と女学生』中公新書。
- 井上好人, 2006, 「菊池幽芳・大毎連載小説『寒潮』をめぐる四高生抗議事件」旧制高等学校記念館第11回夏期教育セミナー発表レジュメ, 松本市教育委員会。
- 井上好人, 2008, 「旧制高校における校風改革運動の勝者と敗者～四高の「超然主義」の神話と「寒潮」事件から～」日本教育社会学会・第60回大会発表レジュメ。
- 唐澤富太郎, 1979, 『女子学生の歴史』木耳社。
- 唐澤富太郎, 1955, 『学生の歴史』創文社。
- 佐藤八寿子, 2006, 『ミッション・スクール』中公新書。
- 関肇, 1997, 「『金色夜叉』の受容とメディア・ミックス」紅野謙介・小森陽一・高橋修『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店。
- 四高開学八十年記念出版委員会編, 1967, 『四高八十年』第四高等学校同窓会。
- 品川主計, 1975, 『叛骨の人生』恒文社。
- 昭和女子大学近代文学研究室編, 1988, 『近代文学研究叢書61』昭和女子大学光葉会。